

石見相聞歌^{いわみそうもんか}

神野麻郎

人麻呂は激しく馬を駆っていた。冠はとうに脱ぎ捨て、蓬髪が風に乱れている。従者の童は、土ぼこりのはるか後方に置き去りにされた。またたく間に国府の集落を出、海べりの道に出た。沿道には地に這うような茅葺きの家々が点在していたが、人麻呂の目には入らなかった。若葉の山がいとわしかった。光降る海が悲しかった。

一気に半里ほどを駆け、道からそれて森の中をしばらく馬を進めると、急に視野が開け、波音が響いてきた。急坂の手前で馬を下り、坂をよじ登り、その岬の突端に立った。西方の海面には奇岩重畳、広い板を千も敷き延べたような平らな岩場が二つ、三つと沖に突き出ている。東側へと頭をめぐらせば、延々とうち続く白砂の浜だ。そして正面には、両腕を広げても余る幅に青海原が広がっている。石見でも指折りと讃えられる、通称辛の崎^{から}の絶景が目の前にあった。

好景を前にして、しかし人麻呂は泣いた。それも声をあげて泣いた。乱れた髪を整えもせず、海に向かって立ち、涙を飛ばしながら髭面の男が咆哮するさまは、さながら鬼のようであった。だが、彼はただ悲しみにうち沈んでいるというのではなかった。彼は――恋にとらわれていた。そのいかにしても心が相手へと引きつけられてしまうやるせなさに泣いた。でも同時に、その悲しみを内側から突き破ってあふれ出てくるような自己の魂の力に、一種の感動を味わってもいたのだ。ああ俺は、こうしてこの途方もない情熱を持って余している。俺が男であり、あれが女であるゆえの。

ことは半月ほど前にさかのぼる。

その日は微風のそよぐ好天で、国衙での勤務を終えた午後、人麻呂は陽気に誘われて従者の童を一人連れ、あてもなく郊外の散策に出たのだった。久しぶりの遠出で、春めいた景色が人麻呂の目にも新しかった。暦はもう三月に近づき、春の遅いこの国でも、ようやくやおだやかな陽光があふれだした。新芽がいつせいに吹きだした山のあちこちで、鶯がさかんに鳴き交わしている。野には若草が萌え出、野良に出て春耕や若菜摘みにいそしんでいる農夫の姿もある。長く厳しかった冬、北の海から容赦ない寒風が吹きつけ、空と海をかき曇らせ、雪を運び、人々を逼塞させていた季節がようやく立ち去ったのだった。

春の気を胸いっぱい呼吸しながら気ままに馬を進めた人麻呂は、いつしか角^{つの}の里

と呼ばれる、海辺の小さな村に来ていた。そのあたりでも今は若菜摘みが盛りで、野山のあちこちから紫色の煙がうすく立ちのぼっている。人麻呂はとある木立の下に馬を駐め、休んだ。するとその近くにも、摘んだ菜を煮ている娘たちの一団があった。そのまどいからは、絶えず歌声が聞こえ笑い声が弾けてくる。人麻呂の日は沈みがちな心がわずかに開かれ、ああ、いづこも春は同じだ、と思えた。藤原の都の近郊の野でも、今ごろは身なりも齢もいろいろの男女が入り乱れて若菜摘みを楽しんでるだろう、かつては自分もそうだった。若い日は野原で村の娘たちと歌いかわした。宮廷に出るからはなやかな宮女たちに取り巻かれて日の暮れるまで大和の春を謳歌したこともある、としばし回想にふけるようだった。

娘たちのかるやかな騒ぎから、「ほら、あの方、人麻呂様よ。きっとそうだわ」という声も漏れてきて、人麻呂の少し解けかけた今の気分にはほほえましく聞かれた。もう二十年も若ければ、きっとその娘たちに歌でも歌いかけてしまうだろうがなと空想し、苦笑も浮かんだ。

と、その娘たちのまどいの中から、まだ幼い一人の少女がやってきて、見るからにこわばった顔つきで、

「あの、あなた様はお役人の人麻呂様でしょ。よろしければ、いっしょに春菜を召し上がりませんか、と姉たちが申しております」とたどたどしくいう。意外な申し出に人麻呂は一瞬戸惑ったが、その懸命に語りかけ、返事を待っている少女の表情もいじらしく、

「それはありがたい。では、ごちそうになるとしよう」と応じ、腰を上げた。

その幼い使者の後についてゆくと、七、八人の娘たちが土鍋を載せた火を囲んでいた。背後には、ヨメナやスマレ、ワラビやゼンマイなどをどっさり摘んだいくつもの竹籠が並んでいる。娘たちは座を空けて笑顔で人麻呂を迎えた。早速煮たっている土鍋の中から菜を散らした粥が粗末な土器の碗に取られ、年かさに見える娘が笑みを含み、

「こんなものでは都のお方の口には合いますまいが、どうぞたくさん召し上がれ。都にお帰りになったら、ゆかりの方へ笑い話の一つにもなりませうから」と、意外にも優雅な手つきで人麻呂に勧めた。人麻呂がフウフウと吹きながらそれを口にした後、「ああ、うまい、うまい」とやや大げさにいうと、とたんに笑い声がどつと弾けた。人麻呂も笑った。それで雰囲気が一気にやわらいだ。

どの娘も身なりは質素だったが清潔で、伸びた手足や表情に健康な若さはずんできた。聞くと、皆が郡役人の娘たちだという。なるほどそこは郡衙の近くだった。

中でも、粥の碗を渡してくれた年かさの娘に、人麻呂は目をひかれた。美しい顔立ちにはなやぎがあった。長く背に垂らした黒髪が目立った。そのうえ挙措に、鄙の娘には珍しい洗練されたものが感じられた。その娘が落ち着いた声で、

「人麻呂様はね、都では誰知らぬ人もない、この敷島の大和の国で第一の歌びとでい

らっしゃるのよ」と、他の娘たちに告げた。それぞれの瞳に、驚きと興味が宿った。そして一人が、

「人麻呂様、都のお歌を聴かせてくださいな。人麻呂様のお詠みになったものを」というと、「そう、ぜひぜひ」と他の娘たちも口々に従容した。

人麻呂ははじめ手を振って断っていたが、そのうちに陽気と娘たちとのまどいの心地よさに、歌うつもりになった。さてどの歌がよいかと思いつめぐらし、そして春の歌だといって、

ひさかたの 天の香具山 あめ この夕べ 霞たなびく 春立つらしも

と朗々と歌った。一通り歌い終わると、すぐ娘たちが、同じ歌を同じ抑揚でくり返した。次に人麻呂も加わって皆で朗唱した。歌いながら人麻呂の頭に、大和の藤原の都の春景色が髣髴とよみがえった。都の華麗な宮殿や堂塔、そして東側に春山と位置どる聖なる天の香具山、そのふもとにたなびく白い霞の海……。この田舎娘たちの頭には、その大和の春がどのように思い描かれているのか。

人麻呂は続いて、「今度は恋の歌だ」と、

遠くありて 雲居に見ゆる 妹が家に 早く至らむ 歩め黒駒

くり返し歌いながら、人麻呂はこうした恋の歌がひとりでのようにほとぼり出た若い日の自分を思い返していた。娘たちも、またくり返しながら、馬に乗って恋人を訪れる男の気持ちを熱く味わっているはずだった。

歌い終わると歓声がさんざめいた。娘たちは口々に、「いい歌だわ」といった。人麻呂は、

「今度はおまえたちの番だよ。さあ、聴かせてくれ」と、少し意気こんでいった。娘たちは口をつぐみ、互いに顔を見合わせた。年かさの娘が、

「この田舎には、都の有名な歌びと様にお聴かせするような歌などありませんもの。困りましたわ」

「いやいや、おまえたちがいつも歌っている歌でいいのだ。それが聴きたい。ほら、さつきも誰か歌っていたではないか」

「ああ、あれ。あれはお姉さんよ。お姉さんは歌が上手よ。あたしたちにいっぱい歌を教えてくれるの。それにお姉さんは、都で暮らしていたことがあるから、都の歌もたくさん知ってるわ」

目の吊り上がった、勝ち気そうな娘がやや誇らしげにいった。

「ほう、おまえは都で暮らしたことがあるのか」と人麻呂が見つめると、年かさの娘は、

「いえ、ほんの少しだけなのです。何も知りませんわ」と恥じらったが、

「そうそう。では皆であるの歌を歌いましょう。『浮沼の池の』よ。鄙の歌ですが、都のお方にはお珍しいでしょう。皆、いいわね」といつて歌いだしたのは、

君がため 浮沼の池の 菱摘むと わが染めし袖 濡れにけるかも

娘たちの身体がはずむように波打った。両手でさも菱を摘むような所作をしながら楽しげに歌う。旋律もリズムも都の歌とは違うが、野からおのずと生い出たようなゆかしさがあった。人麻呂は目を閉じた。合わせた歌声の中に、一筋のひととき美しい声が聞き分けられた。

娘たちが歌い終わっても、人麻呂はしばらく目を閉じたままで余韻を楽しんでいた。我に返ったように目を開くと、間が抜けたようなのをおもしろがってか、娘たちの笑い声がまたはじけた。人麻呂も笑って、

「いい歌だ。『君がため 浮沼の池の 菱摘むと……』。浮沼というと、あの佐姫山のふもとのだね」自然と年かさの娘に向いていった。

「そうですね。よくご存じですこと。菱摘みのときにあのあたりの娘たちが歌っている歌ですわ。ですからほんとうは秋の歌です。でも、さつき菜を摘みながらふと思いついたので。おかしいでしよう」

「いや、いい歌だ。明るい、はずむような、いい歌だね」

「ええ、そうですね。私、大好き」

人麻呂は少し遠い目をして、初春に国守の国内巡行に同道した折に眺めたその池のさまを思い返した。国府からは東方の、川沿いの道を二日もかけて山中に分け入った出雲との国境に、名も高い佐姫の霊峰が雪をまよって聳立していた。その山のふもとにひっそりとまどろんでいたのが浮沼の池。そのとき池の面はまだ寒々としていたが、暖かくなると菱の草が育ち、夏に白い花を咲かせ、秋になると娘たちがそこに小船を出して、菱の実摘みをするわけだ。その娘たちの中にこの娘もいて、誰かを思いながらこの歌を明るく歌っているような気がした。

いったん調子がつくと、娘たちはそれからも楽しそうに歌い続けた。多くは恋の歌で、この地方の野遊びや歌垣で男女が掛け合う歌らしかった。言葉や表現は素朴だったが、機知とユーモアにあふれていた。大和の田舎と同じように、ここでも野に出た娘たちの楽しみはこうして恋の歌に歌いふけることであるらしかった。人麻呂もまたせがまれて、若い時代に作った恋歌を披露した。

み熊野の 浦の浜木綿 百重なす 心は思へど 直に逢はむかも

夏野行く を鹿の角の 東の間も 妹が心を 忘れて思へや

紀州熊野の海岸で見た群生する浜木綿の葉のあのただけだけしい重なり、そのように心は幾重にも重なってあなたを思うが、直接には逢えないことだ……。草茂る夏野をかき分けて進むさお鹿、その頭に生えているまだ短い角、そんなほんの短い間でさえあなたを忘れていないことはない、私の心はいつもあなたに占められている……。

いずれも自然の情景に寄せて恋の心を掘り下げてみた歌で、都の宮女たちの間では喝采を博したのだが、しかしこんな場所で歌うにはいかにも重すぎるなど思いつつ人麻呂は歌った。恋の心にこんなに向き合う経験を、この田舎娘たちはしたことがあるまい。だが、娘たちは人麻呂を歌の師のように仰ぎ見て、都の新しい歌を学ぶ姿勢で真剣に聞いていた。そしてゆっくり自分たちで反芻してみたい息をついた。

初瀬の 齋槻が下に わが隠せる妻

あかねさし 照れる月夜に 人見てむかも

大和の初瀬の神聖な槻の木の下の家に分が隠しておいた妻、でも明々と月が照る夜には人に見つけられてしまうかな。こんなリズムのよい、ユーモアもあって歌いやすい恋歌のほうで娘たちにはわかりやすかった。たちまちその口の端に引き取られて、くり返し歌い、また上の句と下の句を分けて唱和したりして楽しむのだった。

こうして人麻呂はおだやかな春日のひとつときを、すっかり若返った気分で娘たちと歌い暮した。石見に来て、そんなふうに歌を存分に楽しんだのは初めてのことだった。

いつしか日も傾いてきた。別れ際、年かきの娘が名残を惜しんで、

「人麻呂様。ふだんは私もなど口も聞けぬお方ですのに、今日は親しくしていただいてありがとうございます。まことに楽しゅうございましたわ。よろしかったら、またこの角の里にお出かけくださいませ。お待ちしております」と黒目がちの瞳をうるませた。人麻呂は思いきって娘の名と家をたずねた。すると娘は悪びれもせずに答えた。

春野で鄙の娘たちに混じってのひとつときの清遊、それで終わるはずのちよつとした経験にすぎなかった。ところが人麻呂はその夜、なかなか寝つけなかった。夢にも娘の笑顔と若い肢体が現れた。次の日にはもう、昼間も娘の幻影に苦しめられた。つい、「健男の うつし心も 我はなし 夜昼と云はず 恋し渡れば」という若い日の自作を苦く思い浮かべた。散策に出て娘になど逢わなければよかったと後悔した。「玉梓の道行かずあらば ねもころの かかる恋には 遇はずあらましを」。この齢になつてもか、と人麻呂はわが身を振り返りもしたが、このどうしようもなく相手に惹かれて制御できない心は、どうやら年齢とは無関係らしい。そうして困ったことに、その今となつては厄介な思慕は、薄れていくどころか日増しに強くなりまさっていくようだった。

人麻呂は、従者の一人に命じて角の郡役所付近にそれとなくその娘のことを聞きに行かせた。従者の報告はこうだった。娘は郡衙近くの村に母親、妹と暮している。父親は郡役人だったが、先年公用で都へ上り、帰る途中で病死した。娘は少女のころ、その郡の大領の娘が采女となったとき、そのお付きとして都に上ったことがある。都から帰ってから一人の男を通わせ、一子をもうけたが、その子は育たずに死んだ……。娘が人妻だと知って人麻呂は落胆したが、他方で安堵もおぼえた。なるほどあんな年ごろの、あんな美しい娘が一人にいるはずはない。これできつぱりあきらめられるというものだ。

ところが、われとわが心の動きはそうした理屈をやすやすと裏切るのだった。娘が人妻であることはたしかに大きな障害だった。けれども、障害は男の心を萎えさせもすれば強めもする。人麻呂の心は後者に傾いていくようだった。人妻といって、人妻に恋して何が悪かろう。理不尽なのが人妻との恋、それはわかっている。しかし世間には人妻との恋などいくらもあるではないか。俺も若いころは人のうわさに抗しながら人妻のもとへ通ったことがないではない。そう、世間では人妻を恋うる歌もさかんに歌われているのではないか。へうちひさす 宮道に逢ひし 人妻ゆゑに 玉の緒の 思ひ乱れて 寝る夜しぞ多きだ。これはやや取りすました都びとの心だ。それから、へかずの上に 駒を繋ぎて 危ほかど 人妻兎るを 息にわがする、これは崖つぶちに馬をつなく、危ない、それくらい人妻との恋は危ないものだが、しかし……という東国の歌だ。草深いかの 東男たちでさえも、人妻とのはらはらする恋に心を震わせている……。人の心は理屈で割り切れるものでない……。とかえって心は芯が通ったようにたかぶるのだった。

だがすぐ、どうか、とためらいもする。浮薄な都とは違って、ここは石見だ。いったん垣根を越えれば、ことはこの狭い世間、すぐ広まるだろう。うわさに責め立てられるのは目に見えている。俺のことは、まあいい。都の男が地方に赴任して現地の女を娶る、よくある話だ。現にここの国の守も、謹厳を装っている国博士や寺の坊主までもが適当な女に身边を世話させている。しかし、あの娘のほうはどうか。二夫にまみえた女が世間でどんなひどい仕打ちを受けるか。あの女の人生から、俺は安らぎを奪ってしまうかもしれない。いや、俺のことだ、きつとそうしてしまうだろう。だがしかし、そもそもあの女は俺を受け入れてくれようか。人妻なのだ。それに俺はもう、こんな老いぼれなのだ。髪にも鬢にも白いものが混じっている。若い肉体はもうどこかに去ってしまった。それにしても……。

人麻呂は迷いに迷った。恋の懊悩に波のように揺すぶられる心を、一人でもてあまし、いたたまれなかった。

それである夜は、従者に案内をさせて娘の家を見に行つた。ひしゃげたような粗末な竪穴の住居が並ぶ中に、元郡司の住まいらしい、質素だが床と板壁のある家がか弱い月明かりの中に浮かび上がった。男が通つて来ているのかそうではないのか、中か

らはもの音一つ聞こえなかったが、その闇の中に横たわる娘のやわらかな肢体を想像すると息苦しかった。そうして娘の家を一見した後では、悩みはますます深まった。

それで今日は、一人馬を飛ばして辛の崎へ来てみたのだ。

光降る大海の深い青さは、見つめているとやはり悲しかった。悲しかったが、慰められた。今日は海神わたつみの機嫌でも悪いのか、白波が立ち、高いうねりが豪快に寄せている。波は眼下の岸でくだけてしぶきをあげ、岩場を黒くなめしている。ああ、「水沫みなわのごとし 世の人我は」、人生とはあの波の泡沫のごとくだ。結んではすぐに消え、消えてはまた結ぶ。はかないものだ。はかないと知りつつ、人は命を燃やそうとする……。

人麻呂は岬の鼻に座って、深呼吸をし、目を閉じた。心たかぶるとき、若いころから人麻呂はよく自然の中でそのようにしてきた。そうすると万物と一体になれるような気がするのだ。今も自分の魂が、しだいに海や風や土地の諸霊に包みこまれていくと感じられた。長い時間が過ぎ、陶酔が訪れた。やがてその中から、一つの決意が兆した。

その夜、人麻呂はおぼろな月明かりをたよりに、人目を忍んで角の里へと出かけた。娘の家の前の静かな闇に立ち、小声で娘の名を何度か呼んでみた。若い時に異ならず胸が高鳴った。ゆっくり戸が開いて、娘のこわばった顔が青白く浮かんだ。娘は人麻呂だとわかると驚いて立ち尽くしていたが、やがて力のぬけた、絶望に近いような表情に変わった。そしてうなだれ、戸を開けたまま、身を内側に隠した。

人麻呂が石見に赴任して、もう八カ月ほどが経とうとしていた。

その間は鬱々として過ごした。

「石見だと？なぜ、この俺が、山陰道の果ての石見などへ？」

去年の夏の終わり、太政官に呼び出されて石見の掾じょうへの遷任を告げられた時、最初にわいた思いはこうだった。左遷の思いが深かった。それは、位階のみからいえば、微位の人麻呂が石見の国司に指されても何の不思議もなかった。しかし、人麻呂には、俺はただの小役人ではない、十年以上も、この天あめが下に第一の歌人としてふるまってきたという強い自負があった。天皇をはじめ貴顕のおぼえもめでたく、求められて皇子皇女に献歌したことは幾度か。行幸に供奉すれば群臣の居並ぶ前で自作を歌い上げ、常に喝采を博した。都遷りのとき、晴れがましい祝宴の場で歌人を代表して新都を送る宴みやげだのも自分だ。ついこの間も三十数年ぶりに鳴り物入りで発遣される遣唐使を送る宴で、無事を言寿ぐ歌を捧げた。恋の歌は、すさびに作ったものまでも宮女たちがもてはやした。饗宴や旅の歌、恋の歌、挽歌、どれをとっても俺の右に出る者はいない。天が下第一の歌人と自他ともに認める、この人麻呂がなぜ？

誰の画策か？あの男……、と人麻呂は一つの官僚然とした顔を思い浮かべた。正三位、大納言藤原朝臣不比等ふひと。年齢は人麻呂とあまり違わなかったが、先代藤原鎌足の衣

鉢を継いで持統上皇の信頼とみに厚く、また娘宮子みやこを今上天皇の夫人ぶにんに奉ることでも、近年の国家の一大事業たる新令の撰定・公布にも中心になってあたり、その功成つて前年には大納言に抜擢された。そのうえ、宮子が皇子を出産したことでますます威勢を増している。今や人麻呂などそばにも近寄れないくらい、台閣の中樞に不比等はいた。あの男が俺を疎んじるのか？ いや、その向こうに、おぼろに見え隠れしている年老いた女の顔がある。一の人、持統太上天皇。かつては無上の愛顧を受け、自分も誠心から神とまで讃えて歌ったその人に、俺は疎んじられてしまったのか？

思い当たるふしがないではなかった。少し前になるが、去年の春のこと、大極殿の朝廷に親王以下諸王諸臣が集められ、しばらく途絶えていた元号の復活が宣されるといふ建元の盛儀があつた。新元号は「大宝」。同時に、新令によつて一新された官名や位号の改制、それにもとづく服色の新规定も伝達された。さらに叙任任官のことも伴い、藤原不比等が正三位大納言となつたのもその日のことだつた。詔勅を恭しく拝聴しながら、そのたびの諸制度変改の大きさに、きらびやかに着飾つて朝廷に列立していた人々の間には時々静かなどよめきが広がつた。

その後、建元の祝宴が開かれた後の流れで、人麻呂はある貴顕の邸宅での宴に呼ばれて歌を披露した。そのとき、酔いもはたらいて人麻呂はつい不用意に政治批判めいたことを口にしてしまったのだ。その集いには古い家柄の氏族たちの顔が多く、何でも法律、法律と紙に書かれた法律で人を縛つていこうとするこのごろの政治への不満や、名指しはしないまでも暗にその推進役となつている不比等への批判、悪口も人々の口から次々に出た。そのとき人麻呂は、常のように分をわきまえ、下座の方ですつと口をつぐんでかしまつていたのだが、ある男が、「名族柿本氏出身の、あなたはこういうお考えか？」と、うまく持ち上げながら、人麻呂に意見を強いたのだ。それで人麻呂は、つい日ごろ思つていることの一端を披露した。それだけだつた。

だが、あれは罨おぼだつたのかもしれない、と人麻呂は後でほぞを噛んだのだつた。そのころは、不穏分子を捜し出すために密偵の網が張られているとのうわさがあつた。そういえば自分に誘い水を向けてきた男は、近ごろは不比等にだいぶ取り入つているらしかつた。そうだ、俺は、愚かにも誘いに乗つて言わでものことを口にしてしまい、密告されたにちがいない。

去年六月の太上天皇の吉野行幸時の夜宴でも、いつもならまつ先に自分に献歌の下令があるのにそれはなく、従駕の人々も口々にいぶかしかつたほどだ。九月から十月にかけて一月にも及んだ盛大な紀伊行幸の時にはかろうじて下命があつたが、わずかに短歌一首を奉れというだけだつた。人麻呂は以前の紀伊行幸のとき、同じ美しい紀伊の海岸で亡妻と遊んだことを思い出し、挽歌に作つて宮女たちに披露し、わずかに歌心を紛らわせた。

あのこと以来、自分は上皇や政權から遠ざけられている。そうとわかつて、しか

しすべては後の祭りだった。微官の悲しき、命ぜられると準備もあわただしく、山陰道を石見へと下らなければならなかった。大勢の親族知己が別れを惜しんでくれた。かつて親しく仕えた皇子からは見舞状が届いた。馴れ親しんだ宮女たちも使いをよこし、中には今都は遣唐使の出立とあなたの石見行きのおわさで持ちきりですよとわざわざわざわさってくる者さえあった。けれども、人々の対応にはどこかよそよそしく冷たいものも混じっているようだった。まるで罪を得て都から追いやられるような淋しさを、人麻呂はひしひしと味わった。

夏の盛り、土ぼこりにまみれながら人麻呂は道を下った。通り過ぎた数々の小暗い山々では、蟬が呪いのように鳴きしきり、北の海へ流れ入る川も人を寄せつけないように荒々しかった。道の奥へとたどるごとに、人跡乏しく、あれば山のへり、海のへりにへばりついてようやくたつきを立てているような寒村ばかりだった。初めての山陰道の旅も、人麻呂の歌心呼び起こすことはなかった。荒涼とした世界へ果てしなく落ちていくようなその田舎道の果てに、任国石見が、ただただ鄙びてあった。

赴任してもしばらくは、勤めに出る気になれなかった。上司の国の守は、天下一のこの歌人を腫れ物にさわるように遇した。若いころから地方回りに明け暮れ、転任のたびに私財を太らせてきた人物で、一個の現実的な老人にすぎなかった。勤めを強いられないのをよいことに、人麻呂はしばしば欠勤した。それがこのごろ厳しくなってきた考課に響くことはわかっていたが、今更こせこせと勤めて何のわずかな栄達を望むべきものか。

ちようどそれは、中央政府が新令を全国に徹底せしめようと躍起になっていたところで、石見国でも役人たちがその吸収と適用とに忙しかった。

去年の新令公布の騒ぎには、人麻呂も都にいて立ち会った。先帝時代の令にもとづくとはいいつつも、新令は国家を一新するほどの大幅な変更を含んでいた。それはまず在京諸司が習わせられたが、諸国郡まで周知させなければ行政は機能しない。そこで六月には、新令十一巻の写本を携えた使が七道諸国へと散っていった。そして国司・郡司の面々を一堂に集め、新令の概略を説明すると同時に、以後の政も租税の管理もこの新令によるべきことを命じた。けれども、その担当者たちはどの国でも不評だった。彼らは墨の匂いも新しい巻物を片手に説明を行ったわけだが、彼ら自身も都で令の撰定者たちから一通りの説明を受けてきたばかりで、令の内容が十分理解できていくわけではなかった。それに、令と抱き合わせになるべき律の作成が遅れており、この点も理解を困難にした。だから不明の部分を実質されても、使者たちは汗をかきかきしばしば説明に窮したのだった。もつとも、国司・郡司たちの関心もたいいてい、一々の法律の正確な解釈よりは、ただ自分たちの処遇如何という一点にあった。この新令によって社会がどう変化し、百姓の暮しがどう変わるのかという点より、自分たちの勤務や俸給や昇進のぐあいがどう変わるのか、新制度のどこにうまみがあるのかということの方にもつぱら関心は集中したという。ただ、都からの使者たちはそれにも

よく答えられなかった。

八月になって、今度は撰定者たち自身が手分けして諸国に出向き、新令を講じ、不審の条にも答えたので、大きな車輪がおもむろに回り出すように、ようやく新令にもとづくもろもろは円滑に機能し始めた。それでも彼らが諸国を順に廻るには日数を要し、また令文は実務で実践してみないとわからない部分も多かった。

石見国でも去年は同様であったらしい。都からの使者たちが去ってからも、しばらく国庁ではふだんの業務に加えて新令の写本作りやらその学習、周知やらに忙しかった。中央からは早速新令にもとづく租税や軍事に関する書類の提出を求められ、その作成にも時日を要した。そのうえ今年は六年に一度の戸籍の作成年にあたっており、やはり新令によるそのとりまとめせわしさを増した。刑法たる新律はこの春ごろようやく完成し、都ではすぐに習われたが、諸国に届くのはまだ先のことで断片的なうわさだけが届き、かえって混乱を引き起こすようなことがあった。そうしたあわただしさが、人麻呂が赴任したころもまだ続いていた。

人麻呂は、その騒ぎも人ごとのように過ぎた。もともと、律令は彼の性に合わないところがあった。むろん、律令があの大唐国からもたらされた、先進的で国家経営に有用なものであることは彼にもわかっていた。近ごろの大唐や新羅の動静を見れば、このそらみつ大和の国も、大都城の建設に加えて国家の威信と力を高めるその制度の導入を必要としていることも役人のはしくれとして理解できた。また、新都建設と律令による国家改造を先頭に立って推進したのが、あの壬申の年の大乱の勝利者、神とも崇めたてまつるべき天武天皇で、天皇亡き後、その遺志を継いでそれらをさらに推進しているのがその皇后、持統上皇であることもよく知っている。しかしながら、かつて飛鳥浄御原宮あすかきよみはらのみやで初めて令が公布せられて以来、また唐の都を模した藤原の新京に遷都して以来、宮廷は、世の中はどう変わったか。父祖伝来の土地や人民は、国家の名の下にすっかり吸い上げられた。自らの力を恃んで誇り高く古い時代を生き抜いてきた氏族たちは、今や都城の中に宅地を与えられて居住させられ、国家から俸禄をいただく一介の官僚に成り下がっている。何より、法令と文書が人々を支配するようになり、その冷たい制度の網は、宮廷に分厚くかかり、また全国の人民にまで及んでいく。そこでは伝統的な人々のつながりや慣習が否定され、古来の土地との関係も断たれようとしている。それは人間を窒息させてはいないか。そしてその大きな黒い影のような新制度の背後には、制度を操りながらその改編に乗じて私利をはかる者らがたしかにいる。

もともと人麻呂は、大和盆地の北東部を占めた豪族和迺氏の一支族である柿本氏に生まれ、少年時代は故郷の山河を深く呼吸して育った男だった。そして若年時は皇子たちに親しく仕え、そこで歌の才を見いだされた。やがて持統女帝の時代になると宮廷に召され、行幸供奉の讃歌や皇子女に挽歌などを献呈して文名を馳せたのだった。その人麻呂には、伊勢に斎き祀る至高の天照大神の子孫たる天皇、大乱を勝ちとり、

大都をつくり、すべての氏族を統率し、国土は馬の爪が行ける限り、海は船の舳先の至る限り、このあきづしま大和の国を隅々まで治めたてまつる天皇は、神そのものと思われた。

大君は 神にしませば 天雲の 雷いかづちの上に 廬いほりせるかも
大君は 神にしませば 真木の立つ 荒山あらかまなか中に 海を成すかも

この八百万の神います敷島の和の国の中心には、すべてを統べる神聖な大君います。大君は常には慈愛の心で臣民に臨み、時には現人神としての秀でた荒魂あらかたまを振るって闘い、国や民を導く。各々の氏族は、それぞれの部門で清く明き心をもって大君に仕え、治世を助けていく。それによって国家みかどは安定し、榮え、大君の恵みは国の隅々にまで及ぶ。百姓ひやくせいはお上を信頼し、安んじてそれぞれの業に励み、生き生きと幸福に暮せる。人麻呂が信じ、歌でも描こうとしたのはこのような世界だった。そうした世界が、現実にも観念の上でもしだいに失われつつあればあるほど、人麻呂はもつと力をこめて、その理想の世界を描こうとした。

しかし、人麻呂の理想は、現実に裏切られた。たしかに天皇は昔と同じに神にもひとしく、万民の上に君臨している。形の上ではそうだ。しかしその内実は、冷たい官僚の支配が宮廷にも地方にも貫徹するようになっていく。支配を受ける百姓は幸福になるどころか、戸籍や計帳の作成を通じて一々の家族や個人までが国家に把握され、重税と重労働にあえいでいる。そのことは、そうして都から遠い地方に来てみるとますますよくわかった。こんな地の果てのような所でも、天皇の治世を讃えるどころか、怨嗟の声が低く響いている。かつては闊達な地方豪族だった国造くにのみつこは、今は国司の下の郡役人に成り下がり、国司にへつらう一方で民衆に対しては私欲を剥き出しにして収奪をはかっている。この国の隅々にまで及ぶはずだった天皇の恩沢など、どこにも見あたらないではないか。すると、自分が十年余の間、あのはなやかな宮廷で言葉を尽くして天皇を理想の神と歌いあげたしわざは、いったい何だったのか。

新律令は、ますます人間を非人間的に縛るようになるのではないか。実は前年建元の日の私宴の場で、人麻呂が口にしたのはそのような疑問だった。それが反政府の言と受け取られ、密告されたのにちがいがなかった。

上司の国の守がそこまで把握しているのかどうかは知らないが、新令の実施に関しては人麻呂は権官のように仕事からはずされた。それをよいことに、人麻呂は同僚の忙しさをよそ目に見て、孤独に過ごした。この鄙の国には、歌や文学を解するような同僚もいなかった。人麻呂は多く、あてがわれた宿舎に逼塞し、書物に心を遊ばせているしかなかった。それに飽きると、馬をやみくもに駆って人の姿のない所に遠出をした。といて、このゆかりもなかった山陰道の果ての国の風景に慰められるということとはなかった。ここには、ただ荒涼ともの寂しいだけの海と山があるだけで、小山

一つ、小川一つにも名といわれのある大和の飛鳥や藤原や吉野の、靈妙で豊かな自然とは違った。山の靈も川の靈も、ここでは彼によそよそしかった。行き会う人々も、髪もろくに梳らず、頬や顎に髭を伸ばし放題にし、険しい目つきで馬に乗ってうろつく彼を、狂人か鬼かのように眺め、恐れた。

宿舎で一人書物に向かうとき、人麻呂はよく大唐の昔の詩人、陶淵明のことを思い浮かべ、あこがれた。窮屈な役人生活をさっさと放り出し、故郷に帰って耕作や飲酒を友とし、悠々自適に過ごした陶淵明の生き方が近しく共感された。「菊を采る東籬の下 悠然として南山を見る」。あるいは濁世を厭い避けて竹林で酒を酌み交わし、琴を弾じ、清談にふけたという阮籍や嵇康を思った。順境の時にはさして気にも留めなかった彼ら一種の世捨て人たちの生き方が、今は身に迫って理解できた。しかし、とも彼は考えた。彼らはまだ恵まれていた。彼らには帰るべき故郷や行いの自由があった。それに何より、詩人の高い志操をよしとして受け入れる、懐の深い世の中があった。だからこそ、彼らの詩文や逸話が世に残り、こうして遠い島国にまでも伝わってきているのだ。ところがこの大和の国ではどうだ。何でも大唐の文物を喜んで受け入れながら、文学の徒の評価たるや、いちじるしく低いではないか。現実の損得にはさとも、詩人の高い志操をほんとうにわかる人士は皆無ではないか。

人麻呂はまた閑暇の時、よく高市連黒人の風貌をなつかしく思い浮かべた。あの男、今ごろはどこでどうしているか……。

高市黒人は、人麻呂にとって唯一気がかりな同世代の歌人だった。ただ、歌人といっても彼は極端に寡作で、しかも短歌ばかりを詠んだ。そして自分の分を守るとでもいうように、恋や死はいっさい歌わず、旅の歌ばかりを詠んだ。歌の業において、歌体においても歌の内容や数量においても、すべてを貪欲に試みてきた人麻呂と、それは対照的な姿だった。人麻呂が全霊をうちこんで長歌の制作に腐心しているとき、彼はどこかすずしげな顔で旅の孤独を口ずさんでいた。人麻呂が恋に悩み妻の死にうちひしがれているとき、彼はどこかの旅の空で遠ざかりゆく船を眺め、鶴の群れの声に耳を澄ましていた。

旅にして もの恋しきに 山下の 赤のそほ船 沖に漕ぐ見ゆ

磯の崎 漕ぎ廻み行けば 近江の海 八十の湊に 鶴さはに鳴く

いづくにか 我は宿らむ 高島の 勝野の原に この日暮れなば

世人は黒人の歌を愛唱し、そして彼を旅の歌びとだと評した。旅する人皆が味わう孤独や悲しみをみごとに歌う歌びとだと。けれども人麻呂は知っていた。世人の見方のもっと先の方で、黒人は旅にこそおのれの境涯を見出し、人生というものを見つめ、そして旅を楽しんでいるのだと。

黒人をよく知るようになったのは、歌人として持統女帝の宮廷に召されるようにな

ってからで、ともに行幸に供奉して歌を競い合ったこともある。氏や家柄も違い、深く交わってきたわけではないが、たまに会えば、余計な気遣いはせずに胸襟を開いて歌の話ができる相手だった。旅や旅の歌の話を始めると互いに時を忘れた。口角泡を飛ばして語る人麻呂を、黒人は常におだやかな微笑で迎えた。黒人が控えめに語る話が、人麻呂の詩想を刺激した。

しかし、黒人という男には、和して同ぜずといった芯の強さがある。そして自分の歌人としてのふるまいを、どこか冷ややかに眺めているところがある、とも人麻呂は思っていた。

去年六月の、持統上皇の吉野行幸の折もそうだった、と人麻呂は思い返す。亡夫天武帝との思い出の地、吉野の離宮に上皇は在位中足しげく通い、その神秘的な山川を楽しんだが、退位してからは久しぶりの行幸だった。その夜宴で、意外にも人麻呂は召されず、黒人は召されたのだった。

大和には 鳴きてか来らむ 呼子鳥 象の中山 呼びぞ越ゆる

静まった扈従こじせうの人々の前で、黒人がやや低い声で朗唱したのはこういう歌だった。置いてきた藤原京あたりにも、もう来て鳴いているころだろうか、今この吉野では象の中山を、呼子鳥が、妻を呼ぶごとくに鳴きながら越えている……。聴きながら、人麻呂は不満だった。いや、大いに不満だった。やさしくなつかしげな歌であるにしても、主の上皇を讃えるでもなく、仙境吉野をほめるでもなく、ただ望郷の思いをこじんとまりと鳥の声に託しているばかりではないか。かつて自分はこの同じ吉野の地で歌った、「山川も 依りて仕ふる 神の御代かも」と。ここ神聖な吉野の地の、山の神も川の神も、こぞって至高の神たる天皇に御調みつきを献ずると誠心から歌い上げた。あの時聴いていた大宮人たちの間に起こった、呻きとも嘆きともつかぬ底深い感動の波打ち……。それに比べると黒人の、この何げなさはどうだ。

で、人麻呂はその宴がにぎやかに乱れていった時、黒人に近づき、忌憚なくいつてみたのだった。先ほどのあなたの歌は、なつかしげなよい歌だが、しかし行幸従駕の歌としては覇気に欠けるのではないか。自分なら、ああは歌わぬぬ、と。時の状況からすれば、それは歌を召されなかった歌びとの僻みともとられかねなかったが、そうした点、人麻呂は黒人を信頼していた。黒人は常のように人麻呂の言葉に静かに耳を傾けた後で、べつに機嫌を損じたようすもなく、おだやかに口を開いた。

「それは、歌についての考え方が、あなたと私で多少違うからでしょう。あなたは歌われる時、あなた自身が神のようです。あなたは言葉の世界に王者のように君臨し、歌の力で世界のすべてのものを呼び込もうとなさる。神も、山も、川も、人も。それは他の誰にもまねのできぬ、あなた一流のすぐれたわざです。そんなあなたに、讃歌はもつとも適しています。『山川も 依りて仕ふる 神の御代かも』、あなたにしか

こうは歌えぬ。しかし、私にとつて歌とは、一個の人間のささやかなつぶやきでしかありません。それ以上でも以下でもありません」

人麻呂は黒人の弁明にはなお不満だったが、新鮮な歌の批評に触れたような気もした。一個の人間のささやかなつぶやき。黒人において歌がそのようにありえるとは、驚きに値した。けれども黒人の言葉は、聞きようによっては、人麻呂の渾身の歌い方を大袈裟で娑婆つ気が多すぎると、痛烈に批判しているのだった。

彼も人麻呂と同じく微官であり、歌の才もふんだんに持ち合わせながら、人麻呂のようにそれを功名の手段とはしなかった。いや、人麻呂とても功名のために歌を詠んできたわけではないが、結果として彼は歌の献呈を通じて天皇や皇族の庇護を被り、貴顕にも近づけたことには変わりがない。黒人の方は、そんな人麻呂の行き方を遠くからどこか冷ややかに眺めているようだった。おまえは詩人のくせに何をあくせくしているのだ。この世での名声や栄達など、そんなとるに足りぬものは、俺はどうに捨てたよ、とその涼しげな横顔が語っているようだった。

あの男、今ごろはどこでどうしているか……。人麻呂はこうして鄙へ追放の身となつてみて、黒人の心が今まで以上にわかる気がした。欲得渦巻く都の喧噪を逃れ、近江の湖や三河あたりの田舎道を淋しい心で旅している境涯が、あの男にはもつとも似合っている。そこから人間の孤独を見つめる、美しい歌がつぶやかれる。その歌境には、劇的な感動はないかわりに、自然と人生への深い観照があった。あくなき生への渴仰のかわりに、静かな諦念があった。

夏・秋は鬱々と過ごした。冬は都よりも長く、厳しかった。曇り空の下、雪まじりの寒風が海から吹きつける日々が続いた。潮が泡となって空の上に乗って吹き飛ばされる荒涼とした海景に向かっていると、孤独の思いがまさった。

そのうち都から、持統上皇の三河行幸のうわさが届いた。そちらの方面には十年ぶりの旅だった。上皇の一行はさらに尾張、美濃、伊勢、伊賀と、地元の人々に位階や禄を下賜しつつ経めぐつたという。還暦も近い老女帝の意気軒昂なさまが天下に喧伝された。ところがそれから間もなく、年も暮れになって、早馬が来て上皇崩御を知らせ、国府を驚かせた。うわさはすぐに下々にまで伝わり、この鄙の国でもひとしきりの騒ぎになった。

人麻呂は複雑な感慨をいだいた。かつて自分を選抜し、歌で至高の神とも讃えさせ、後にはこうして辺陲の地に追いやつた一人の人の死だった。世はどう移るだろう、と考えた。いや、急激な変化はあるまい。先帝天武天皇の崩御の時もそうだった。あの壬申の年の戦乱以来もう三十年も続くこの天武・持統両帝の治世の間に、新都城の建設、律令や官僚組織、中央による地方の統治や徴税制度、また宮廷儀礼や神祇の祭祀など、世の中を治めていく仕組みはすべて整えられていた。国家的施策によって仏教も興隆し、国家の栄えを背景に久しぶりに遣唐使を送って大唐との交流も再開しようとしている。若い天皇も健在で、藤原不比等を要とする政権の安定は当分ゆるぎそうもない。

しかし、人麻呂一個にとつては、それは確実に一つの時代の終わりを意味した。もう歌人として召されることは永遠にないだろう。振り返れば、自分の栄光も至福も没落もかの女帝とともにあったのかもしれない。その人の死。時代はまたひとつ、人麻呂を置き去りにしていくようだった。

よさみのおとめ
依羅乙女、とその娘はいった。乙女のもとへ通いだしてから、人麻呂の生活は一変した。

その恋の成就に人麻呂は強引だった。乙女の夫という人は、同じ角の里に住む郡役人の一人だったが、人麻呂はある日突然その男のもとへ押しかけ、直談判に及んだ。まだ若いその男は、国の役人でもある人麻呂が鬼のような形相でまくしたてるのに恐れをなし、結局人麻呂の今年の俸禄の一部と引き換えに乙女を人麻呂に譲ることを承諾した。人麻呂は力づくで乙女を奪ったのだった。

そうしたことは、狭い角の里の人々にすぐ知れ渡り、やがて国衙にも伝わった。怠け者の役人人麻呂が、今度は年甲斐もなく恋に狂ったとうわさされた。しかし人麻呂自身はいったんことを起こしてしまふと、後はもう意に介さなかった。乙女にも言い聞かせた。世間のうわさは海の波のようなものだ。ざわざわとこうるさいが、いつかはおさまる、と。乙女もけなげに、あのあなたを受け入れた夜から私の心は決まっているのです、と人麻呂に伝えた。うわさに打たれる痛みよりも、人麻呂はただ依羅乙女との交情が嬉しかった。若い日の情熱がもどってきたように、乙女の若々しい心と身体に没入した。

乙女は人麻呂が想像した通りの女だった。野の匂いをもっているが粗野ではなかった。賢しく思いやり深く、しかも奔放なところがあった。初めのころ、人麻呂は乙女と一日と離れていられなかった。思い余って、そつと役所を抜け出し、昼間から乙女の家を訪れることもあった。よく野山や浜に連れ出し、馬を駆けさせ、歌いあい、抱擁しあった。余儀なく離れている時も、玉梓たますざきの使いが朝となく昼となく二人の間を往復した。

乙女を知るようになって、人麻呂の目に石見の自然が一変してあざやかに見えてきたのも目ざましい変化だった。それまでは荒涼とばかり映っていた山河のたたずまい、海の景色が、乙女を思うだけで生き生きと形を整え、色を深め、親しげに二人を祝福するようだった。長く忘れていた歌心が、人麻呂によみがえってきた。

ある夏の一日は角の海岸つらぎに遊んだ。白砂の浜がどこまでもうち続き、船着き場もないので海人の姿もまれだった。何もない無用に長いだけの海岸、都から赴任してきた同僚たちは角の浦をそう評した。船の停泊や船遊びにも便のある難波あたりの海岸、あるいは紀の国の名勝若の浦あたりに比べていうのだろう。だがこの角の海岸にも一つの浜と別の浜との間には岩場が突き出、荒磯があり、そのめぐりの青々とした水底には黒々と海藻が揺らいで魚が豊かに泳いでいた。ふと岩陰で乙女は衣の紐を解き、

裸になって海に入ってしまった。そのまま少し沖へと泳ぎ、笑いながら手を振っている。人麻呂はあつけにとられたが、しかし海女ならずともこの地方の女たちは、野山に入れば若菜や木の実を採るのと同じように、海に入れば藻を茹り、貝を獲るのだった。依羅乙女にとつても、磯は自分の家の庭みたいなものなのだ。

乙女が呼ぶので、人麻呂も久しぶりに泳いでみる気になった。彼も若年のころは、故郷の川や池でよく水遊びに興じたものだ。下袴だけになって水に入ってみると、おぼつかないながら何とか身体を浮かすことができた。乙女は鮑でも捕ろうというのか、潜水をくり返していた。乙女の白い裸身は薄く輝きながら青い水底に沈んだ。そして豊かな黒髪を靡かせながら岩礁を覆う海藻を分けていった。その林のように生え並んだ海中の美しい藻は、不思議な動物のように波の動きにしたがつてゆっくり起き伏しをくり返していた。なめらかにくり返すその動きは、どうかすると寝所で抱擁に揺れる乙女の姿態に似ていた。

その夜人麻呂は筆を執り、久しぶりに歌を書きつけようとした。それもふとある靈感に打たれて、長歌を試みようとした。

石見の海 角の浦廻を

浦無しと 人こそ見らめ

潟無しと 人こそ見らめ

よしゑやし 浦は無くとも

よしゑやし 潟は無くとも

鯨魚取り 海辺を指して

柔田津の 荒磯の上に

か青なる 玉藻沖つ藻

朝羽振る 風こそ寄らめ

夕羽振る 波こそ来寄れ

波のむた か寄りかく寄る

玉藻なす 寄り寝し妹……

石見の角の海を見た人は、ここはよい浦も潟もない、つまりぬ海だと言うだろう、でもあの柔田津の荒磯のあたりには、色あざやかな藻に向かって、朝鳥や夕鳥の羽ばたきのように、波もやってくれば風も寄ってくる、ああそして、その波につれあちらへと揺れこちらへと動く美しい藻、その藻のように仲良く寄り添って寝たわが妻よ……。まだ青い水底で乙女とたわむれているような感覚が人麻呂を酔わせていた。

恋を長歌で歌おうとするのは、若いころの習作は別として、人麻呂の長い作歌生活の中でも初めてのことだった。長歌という叙事の形式は、たとえば天皇を讃え、土地を讃えるという行幸従駕の献歌にこそふさわしかった。あるいは、死の悲しみを述べ、

死者の生前の光輝を叙する挽歌にこそふさわしかった。他方、恋の歌は短歌と昔から相場が決まっていた。しかしそのときの人麻呂には、一つの場面や一つの感情を写し取るだけの短歌ではものたりない気がした。石見の自然とともに生きる乙女の姿や生の律動、また乙女とともにすごして味わった感情の起伏は、叙事の文体とうねるようなリズムでなければ到底とらえがたいと思われた。

また、静かに乙女と語りあう夜があった。人麻呂は乙女のことを何でも知りたかった。中でも乙女の目で見た都のことは、人麻呂にかえって新鮮だった。

「采女に選ばれた弟姫様について都へ上ったのは、四年前の春ですわ。音に聞く繁華な都への、娘らしいあこがれで胸をはずませていました。でも、行く先々の街道沿いの村々では、飢えた人や行き倒れの死人をたくさん見たのですよ。それはそれは怖かったですわ」

「ああ、そのころのことは私も覚えている。ちょうど天子様が替わられてまもなくのころだったが、諸国で早魃が二年続いた。餓え死にした者もたくさん出て、ひどいころだった」と人麻呂はいった。

「でも、藤原の都は私などの想像以上にきらびやかでしたわ。まるで別世界のよう。田舎出の私はたちまち心奪われました。あの瓦葺きの宮城の御殿の大きさ、麗しさはどうでしょう。宮の庭での行事の数々も、はなやかで立派で驚きました。

街は縦横にまっすぐ延びる路が通って、お偉い方々の大きなお屋敷や彩り豊かなお寺の数々が立ち並んで。中でもお宮の南の^{おおてら}大寺の臺や塔の見事さといったら。私、大寺の近くに行くときよく口をぽかんと開けて見上げたものですわ。道行く人に笑われました。お寺からは、読経の声や法会の楽の音が優雅に聞こえてきました。

都大路を行きかう牛車や人々……。また北の方の市の市のにぎわいといったら。^{あまびと}商人やお偉い方たち、^{つわもの}兵士、お坊さん、^{ほかい}乞食人に遊女^{うかれめ}でしよ。異国の人々も……。いろいろな身なりの人々が集まっていた。そして売られている物の多さ、珍しさ」

回想しながら乙女の瞳はあこがれを宿す。けれどもすぐ、こうも付け加えたのだった。

「でも音に聞いていました明日香の川が、汚く濁っていたのは意外でしたわ。それに新京の建設はまだ続いていて、溝を掘ったり家を建てたり、ずいぶん騒がしくもありました。そして都大路や川原にも、ぼろぼろの服を着て、痩せて青菜のような顔色をして所在なげにたたずんでいる人たちがたくさんいましたわ。病気で伏している人も多かった。人麻呂様、あれは、飢饉の地方から逃げだしてきた人たちだったのでしゅうか？」

「そういう人たちもたくさんいたね。それに諸国から^{みつき}調庸の運搬や力役の提供のために上って来たが、帰る方途を失くした人々も混じっていたはずだよ」

乙女の父もそうして都に駆り出され、病を得て亡くなったことを人麻呂は思った。

若い新帝の後宮に出仕した郡司の弟姫について、乙女は御殿の奥深くにも入り、後

宮の暮しぶりも多少は知った。

「そのころ、宮中ではこんなすてきな歌がはやっておりましたわ。『藤原の 大宮 仕え 生れつくや 娘子が伴は 羨しきろかも』。きつと、あなた様もご存じのはず」
新都藤原の大宮に仕えるように生まれついた乙女たちは、何と羨ましいことよ、幸運なことよ。遷都以来、都の周辺で長く歌い継がれている歌だ。乙女の夢見るような笑顔を見ているうちに、実はそれは自分の作なのだよ、と人麻呂はついいいそびれてしまった。

その歌のように、後宮は宮女たちがきらびやかに装い、優雅にふるまう華やかな世界だった。しかしそれは見かけであり、中に入ってみると采女たちの社会は嫉妬やそねみ、いじめや追従に満ちていた。もともと彼女たちは、諸国の郡司層から人質のように宮廷に集められ、下級の宮女として主に天皇の食事や身のまわりなどに奉仕する役職を与えられているにすぎなかった。新参の采女は、古参の采女たちに軽くあしらわれ、いじめを受け、あるいは付け届けを要求された。それがいやでも、都の言葉や宮廷での作法を習い覚えるには、彼女たちの教えを乞う必要があるのだった。いやなことでも多く経験したのだろう、乙女はそれらのことを無念そうに語った。

「あの方は、それは氣立てのやさしい方だったのですよ」と、乙女は自分が仕えた郡司の娘のことをいった。その弟姫という人は乙女の幼いころからの遊び仲間で、都に上ってから乙女は弟姫の苦しみを自分のものとして寄り添って生きてらしい。

「ですから、あの方はそんな気詰まりな生活に耐えられなかったのですわ。都に上って半年も経たぬうちに、かわいそうに病にかかられました。幸いそれはまもなく癒えたのですが……そのころ、あの方が通ってこられるようになって……」

ようやく健康を取り戻した弟姫は、今度は退屈に倦んだのか、ある貴族の子息とひそかな恋仲になったという。しかし采女は天皇の所有、天皇以外の男と関係すれば厳しく処断される。やがてうわさが狭い後宮に広がった。采女はそれを苦し、半狂乱のようになって、ある日香具山のほとりの磐余の池に身を投げた。有力な貴族の子息だったので、男の方は罪を問われなかった。

ひとしきり都を騒がせた事件で、人麻呂もそれをよく覚えていた。人麻呂は歌人として後宮にもしばしば出入りしたので、采女たちの消息にも多少は通じていた。そしてその石見の采女と同じような悲劇を目の当たりにしたこともある。あれは都遷りの前後だったか、行幸先の吉野で、出雲出身の采女がやはり悲恋のために吉野川に身を投げ、ただちに火葬されたのもまだ生々しい記憶だった。その采女を見知っていた人麻呂は、采女に同情してすぐに哀切な挽歌を捧げ、その魂を弔った。人麻呂がまだ少年で近江に都があったころにも、美女のほまれ高かった吉備の津の評出身の采女が、やはり道ならぬ恋のために自死を遂げるということがあった。長く宮廷に語り継がれているその悲劇を、人麻呂は後年長歌に歌いもした。地方出の可憐な少女たちが、繁華な都に来て恋を得るのは人情の自然だった。しかし国家の非情な制度はその自然を

裁断した。人麻呂はそこに同情し、いたたまれず、せめて歌の言葉にだけでも采女たちのありし日の姿をとどめたかった。

さて依羅乙女は、主人を失ったところで都の滞在を終えたのだった。親しんだ弟姫のその酸鼻な結末に立ち会い、そして官が弟姫の遺体を罪人のごとく扱うのを見て、乙女の心は凍りついた。

「石見に帰ってからも、私、半年ほどは誰にも会わず、家に閉じこもっていたのですよ。そして、そのことで都へのあこがれもすっかり消えました。私はこの石見で土にまみれて一生暮していくんだと心に決めたのです」

それでも乙女は、折々に都でのこと、出会った人々や折々の風流をなつかしみもした。都では皇族や貴頭の姿も多く見かけたという。もちろんお上りの采女の従者にすぎない乙女に声をかけてくるような高官はなく、ただ遠くから眺めるだけだった。

「何度か、あなた様のお姿もお見みかけしたのですよ」と、乙女は笑った。人麻呂は驚き、

「ほう。いずこでかな？」

「初めはあの楽官の、渡り廊下のところですね。あれが人麻呂様よ、と連れの方が教えてくれたのです。ほう、あれが天が下一の歌びと人麻呂様か、と私は見つめました。あご髭をしきりに撫でながら、難しそうなお顔で渡っていかれましたわ。歌でも案じておられたのですか？」と、また笑いころげ、人麻呂を苦笑させた。

「それが、今このように。人の世はわからぬものですね。私にとっては、あの時が最初の出会い。運命だったのですね」

意外だったのは、高市黒人のことを乙女が知っていたことだった。大和の高市の黒人の大領の家系に黒人は連なるが、その仲のよい同母の妹がやはり宮女として出仕している、乙女が仕えた弟姫を何くれとなく庇護してくれたのだという。その宮女のもとへ黒人はよく通ってきて、物を与えたり冗談を飛ばしたりした。分けへだてのないきさくな人柄で、乙女を見かけるとやさしく声をかけ、石見のことなどをよく尋ねてくれた。気のおけない、おもしろいお方だったと、乙女はじかに教わったのだという黒人の旅の一首を口ずさんでみ、なつかしがるような目つきをした。人麻呂の知らない、黒人の褻の生活の一面で、多少の嫉妬もおぼえながら、人麻呂もあらためて黒人の風貌をなつかしんだ。

その高市連黒人が、夏の終わりに石見を訪れたのだった。

今年正月初めに七道に巡察使が発遣されたことは、人麻呂も聞き及んでいた。山陰道には、従七位下、波多真人余射が長として遣わされた。巡察使の一行は都に近い丹波の国から始めてすでに数カ国を経巡り、ようやく道の果ての石見にたどりついたのだった。そのさすがに長旅にやつれた一行の中に、高市黒人のなつかしい顔が混じっていた。

一行の接待は、まず国守の館での宴から始まった。あかあかと篝の火が焚かれ、旨酒が取り寄せられた。近傍の遊女うかれめが集められ、都への土産にする珍品が贈られた。老練な国の守は、まだ若く、位階としても自分より下の巡察使、波多真人余射を、手を擦り合わせ、追従の笑いで遇した。今回の巡察の主目的が、前天子の崩御という非常時にあたり、地方に不穏な動きがないかどうか監視することにあることは誰の目にも明らかだったが、表向きの理由は「政績を巡り省て、冤枉えんわうを申し理ることば」、つまり各国郡の政治の善し悪しや裁判の適否を調べ、復命することとされていた。巡察使の報告次第で、地方役人たちは褒美も与えられれば罰せられもするのだった。

その夜、国の守たちの歓待に、巡察使たちは旅の疲れも忘れたように遅くまで騒いだ。いい加減酔った後、多くは気に入った美女を伴ってあてがわれた寝所に下がった。

人麻呂は黒人を自分の館へといざない、淡い火影のもとで土器かわらけの酒を勧めながら、あらためて久闊を叙した。膝を交えてゆっくり歓談するのは、一昨年こぞの秋、紀伊行幸に同道した折以来だった。

「こうして道の果ての石見の国で再会できるとは何たる幸運か。あなたに会いたかった」と人麻呂はまず口にした。

「まったく同じ思いがします。私もここしばらく、あなたに会えず寂しかった」と黒人も日焼けした顔をほころばせた。

話題は都の情勢から、おのずと前天子の崩御に及んだ。黒人は十月の三河行幸にも同道したので、それから崩御に至るまでの前天子のように、まわりの動勢によく通じていた。また、

「今はまだ殯もがりの最中で、都では歌舞音曲が禁じられ、ひっそりとしています。寺々では間断なく読経が続いています。……上皇のご遺骸は、遺言によって火葬に付されるそうです。そして先帝の御陵に合葬されるらしいと、もっぱらのうわさです」という話も耳新しかった。

もう十七年も前になるが、先帝、天武天皇の崩御の折には、葬儀までの殯の宮が飛鳥浄御原の宮の朝堂院の庭で長々と二年以上も営まれたことを人麻呂は思い出す。その間、皇族をはじめ臣下や僧侶や外国使らによるおびただしい儀礼が殯宮に捧げられたのだった。そして新京の朱雀大路の真南、旧都飛鳥の地に、新京の鎮めのようにいかめしい御陵が営まれた。上皇がその陵墓への合葬を希望したのは亡き夫帝を慕うゆえにちがいないが、人々に両帝の偉業をいつまでも忘却させず、その子孫に皇統を継がせるべく威圧する思惑もあるのだろうと察せられた。小高い丘の八角形の石によるわれた御陵から、まっすぐに北方の宮の動静を睨み下ろすのだ。天皇としては初めての火葬を言い残したのも、気丈な女帝らしかった。

黒人はこうもいった。

「御大葬は今年の年末になるようです。あなたが召されて、挽歌を献ずるだろうとの推測もありますよ。そしてそれを機にあなたを都に呼び戻すのだと」

人麻呂は驚きつつ、

「いや、それはありますまい」と一笑に付した。上皇からはいったん遠ざけられたわが身だ。たとえ自分が在京していたとしてもそれはありえぬ、と思えた。

黒人の話によって宮廷や都の最新の事情が知れたことに人麻呂は満足をおぼえたが、しかしそれらはどうかすると自分とはもうゆかりもない、遠い人ごとのようにも聞こえるのだった。人麻呂のそんな反応を黒人はややいぶかしむようだった。それよりも人麻呂は、その三河行幸時の、黒人の献呈歌、

いづくにか 船泊ふなはてすらむ 安礼あれの崎 漕たぎ廻み行きし 棚無し小舟

を聞いて唸った。旅先の小舟、それを見送る詩人の目と心の動き。詩人は小舟の行方に人生というものを見つめている。この寂寥はどうだ。そして、

桜田さくらだへ 鶴鳴たづき渡る 年魚あゆち市潟 潮干にけらし 鶴鳴たづき渡る

「桜田へ……。これは何という境地だろう。どうして感情がこれほど静かに澄んでいられるのか。怖いくらいの出来ばえです。景色のはなやぎを叙しながら、旅人の寂しさも喜びも現されている。「鶴鳴き渡る」のくり返しも単純でありながら秀逸だ。旅の気分と景色とがこれほどに溶け合い、一体となったこんな歌はかつてなかった。これは必ずや、後世に長く歌い継がれるでしょう。あなたは、とうとう完成されましたね。旅の歌びととして」

天下一と称えられる人麻呂に面と向かってそういわれて、黒人もさすがに面映ゆく、胸の前で手を振った。

人麻呂の方は、問われても歌いあげるべき新作はなかった。しかし、代わりに依羅乙女のことを語った。四年前、磐余の池に身を投げた采女のことをいうと、黒人もすぐ思い出した。

「そういえば、哀れだったあの石見の采女には、一人よい娘が付いておりましたな。あの娘とあなたが」と驚きを隠さなかった。人麻呂は、乙女との出会いから語った。常の調子で、語るごとに声が高まり、その熱意はまるで恋に落ちた青年と異ならなかった。黒人はほほえんで聞いていた。そして、

「明日からは忙しくなりますが、仕事の合間にでも、その依羅乙女にぜひお会いしたいものです。案内をお願いしたい」といった。

「承知しました。角の里にご案内しましょう。乙女もなつかしがるでしょう。それから角の浦もぜひお見せしたい。畿内にはない、山陽の海とも異なる、美しい海岸です」二人の話は尽きなかった。都ではなく鄙の一隅で巡り会ったからこそ、かえって心が通いやすいようだった。気がつくとも夏の夜は早明けかかり、鶏鳴に続いて薄闇の中

で鯛が澄んだ声でりゆるりゆると鳴きはじめた。一つが鳴きだすとあちこちからそれに応じる声があがり、やがて耳の内にかしましいほどになった。

その朝から、巡察使たちはまず国庁で仕事に取り掛かった。そのための部屋が用意され、書記役の史生たちが、命ぜられるままにさまざまな書類や木簡を運び入れた。必要があれば、史生のみならずその上司が呼びつけられ説明を求められた。石見国では国の守に継ぐ地位の人麻呂も何度か呼び出され、日ごろ政務にはあまり通じていなかったので困って苦笑せざるをえないような場面もあった。

「政績を巡り省て、冤枉を申し理る」というやや抽象的な目的の仕事は、巡察使の裁量次第で詳しくもなり、簡略にもできた。が、帰京して朝廷へ復命する段になると今度は自分たちの仕事の可否も問われるわけで、要点は押さえなければならなかった。彼らはもう半年近くの間、数力国を経巡って来ていた。それで手順も馴れたもので、ときばきと仕事をこなしていった。精力的なのは、この国を調べ終わればようやく帰京できるという心はやりもあるからだだった。夜はまた国の守主催の宴が、連日催された。

彼らの国庁滞在は七日間ほどで、後は各郡衙を巡っていくのだったが、その間に一度は依羅乙女が国衙にある人麻呂の館を訪ねてきた。黒人の滞在を人麻呂から聞いた乙女が矢も盾もたまらず、黒人に会いにやってきたのだった。また一度は、人麻呂が黒人を角の里の依羅乙女の家案内した。乙女は自分のいかにも貧しい居ずまいを恥じつつも、嬉しげに二人をもてなした。この三人のこととて、少し酒がまわると歌が出た。男たちは乙女の美しい声に陶然とした。二人の歌人は思い出しつつ自作の歌を朗唱し、また和した。人麻呂はあの乙女と泳いだ日の夜に浮かんだ歌句を、まだ制作途中のままに披露もした。

歌い疲れてさすがに沈黙が落ちた時、黒人がぼつりといった。

「あなたは、石見に来てすっかり変わられましたね」。

人麻呂も同意したいところだったが、

「ほう。どう変わったかな？」

「心の自由と平安を得られた。……包み隠さずに申しますが、私は実は、ここに来る前は恐れていたのです。あなたの落魄のお姿を見てしまうのではないかと。そうであれば、私にも大変つらかったのです。だが、お目にかかる、それはまったくの杞憂だった。以前の、何ものかに追われているような、衝迫の気分が消えています。何か重荷を下ろされ、身軽になられたようです。郷里ではなくとも、ここであなたはかの唐土（たうと）の陶淵明のように日々を自足し、心自由に暮らしていらっしゃるようにお見受けします」

「心の自由……。なるほど、そうかもしれない。ここに来てしばらく、私は鬱々として心安まらなかった。放逐され、自分が鬼になったようでした。あなたのいう、落魄の姿をさらしていたことでしょう。しかし、今はたしかに楽な気持ちでいられる。陶淵

明のようにはいかぬが」

「今の時代、心安らかに生きられる人は少ないのではないのでしょうか。……私はここに来るまで、諸国の実情を見聞してきました。ひどいありさまでした。民はうち続く災異と税の収奪に疲弊しています。それを見守るべき役人は、私腹をこやすことにしか興味がありません。都では新令に則った官衙の整備やらさまざまの儀礼やら、派手に国家の繁栄を演出していますが、実情は政治は無道、財政も逼迫しています。私の見るところ、久方ぶりの遣唐使の派遣も、民の目を国外にそらす意図があります。時代はこれからますます逼塞し、人々の不自由、不幸は増すでしょう。かの先帝の時代の理想は、もう再びもどつてこぬように思われます」

黒人の多弁を珍しく思いながら、人麻呂はうなずいた。先帝の時代の理想、とは、あの壬申の年の乱後、意気壮んな天武天皇の強力な指導のもと、新国家の建設を目指して人々に活気と希望があふれていた時代の空気を指す。人麻呂も黒人もそれを深く呼吸しながら青年期を過ごしたのだった。だからこそ後年人麻呂は、誠心から歌で天皇を至高の神とも讃えられた。けれども今振り返れば、黒人の言葉にもかかわらず、改革の美名のもとに旧を断ち切り、今日の閉塞を準備したのもあの先帝の時代ではなかったか。まぎれもなくそうなのだ。国家の見かけの繁栄と人々の幸福とは別のことではないか。それをいちばんよく知っているのは、目の前にいる黒人だろう。

「あなたのいわれる通りだ。私もこれからは反省して、せめて良吏を目指さずばなりませんまい」

二人は笑った。人麻呂の軽口ともとれるその言葉には、以前は天下国家のことをまくしたてるのは人麻呂の方で、黒人は静かな聞き役であったが、今は立場が逆転してしまったこと、またそれに二人が同時に気づいたことのおかしみがあった。

「あなたはほんとうに自由を得られた。この方にあなたは救われたのでしょうか。お二人を見ているとよくわかる」と黒人は二人を見比べた。乙女の顔にはなやかな笑みが広がった。

「そうです。私は救われた。だが、私はこの人を不幸にしたのかもしれない」

「いや、そんなことはありませんまい。それはこの方の笑顔が語っていますよ」

しかし、乙女は、

「ええ、ええ。私はこの方に押しかけられて人生が変わりましたわ。私の元の夫から私を奪ったのですもの。私は不幸な女ですわ。誰よりも不幸。だって、やがてこの方は都に帰っていかれるでしょう。その後、私は一人でどう暮せばよいのです。遊女うかれめにでもなりますか」

冗談めかして乙女がいったので二人は笑ったが、乙女の本心もこめられていると人麻呂には察せられた。その証拠に、乙女の瞳は少し潤んでいる。

「いや、私はもう都には帰らぬつもりだ。私は都にもう何の望みがあるわけでない。

おまえとここで余生を暮すことに決めている」

「そんなこと、初めてうかがいますわ。……でも、そんなこと、できるわけがありません。天子様がお許しにならない。黒人様、そうでしょう？」

黒人は答えに窮した。人麻呂が、

「いや、できぬことではないよ。もし都に召されることがあったら、私は朝廷に致仕を願ひ出るつもりだ。願ひが叶わなければ浮浪、逃亡、何でもしておまえのもとに戻ってくる。さてさて、よいな。この件はたった今、決めたぞ。ちようどよい、この黒人さんを証人としよう」

「まあまあ、人麻呂様、だいぶ酔われましたね」

やがて黒人を含む巡察使の一行は、あわただしく国府を去り、各郡の巡察に旅立った。一行が角の里近くの郡衙に滞在したとき、人麻呂と乙女はもう一度黒人に会うことができ、角の浦も見せたのだが、それが最後だった。秋の初め、色づいた田の面に蜻蛉がさかんに舞うころ、一行が無事巡察を終えて帰京していったという郡役人の報告を、人麻呂は国庁にいて聞いた。

秋の夕暮れ、人麻呂は馬をゆつくり角の里の方へと歩ませていた。日が早く落ち、冷気が身にしみるようになってきた。

先をよろよると歩いていた農夫たち数人を追い越した。農具や収穫物をついだ彼らは道の端に退き、頭を垂れた。

色を失った景色の中に、籾殻を燃やす煙があちこちの田の面から上がっている。もう刈り入れも終わり、やがて諸郡から田租を国倉に収めに來る農夫たちが、道に列をなすだろう。今年は畿内や筑紫の凶作が伝えられたが、この石見では幸いに日照りや大風の害も少なく、農夫たちの表情もいくぶんなごんで見える。女たちは家で織布に余念がないころだ。それらの多くは、調庸物としてやがて男たちが都に運んでいくことになる。官倉に収められたそれらは、宮廷の使用に供され、また貴族や官人の俸禄ともなる。そうした物や人の流れが、今の人麻呂にははっきりと見えた。

黒人に会って以来、人麻呂はおだやかな気持ちで過ごしていた。黒人の言葉は、乾いた土に慈雨が降りしみるように人麻呂の心をうるおした。乙女と出会ってもまだわだかまっていた自分の不遇への慨嘆、世に対する怨恨のようなものがあつさり消えてゆく思いだった。黒人と対しながら、自分自身の心のありようがはっきりと見えた。そして黒人はそれを祝福して去っていった。

役所を欠勤することもなくなった。のみならず、国の掾としての仕事に励んだ。国内の非違を正し、公文の草案を審査する、というのが掾の主な仕事だったが、行政万般から裁判、神祭りまでを仕切る国の守の補佐役も勤めた。都の太政官や各省からの連絡に対応し、郡司や里長に指令を与えたりするのも国司の仕事だった。もとより人麻呂は漢籍も読みこなせる教養の持ち主で、朝廷の諸事情にも通じていたから、少しやる気さえ出せば仕事ははかどった。急に精を出すようになった人麻呂を国の守や下

僚たちはいぶかしみ、あれは巡察使の報告が恐くなったのだろう、今からでも成績を上げようとしているのだろうなどと陰口を叩いた。が、人麻呂は意に介さなかった。窮状の訴えや訴訟など、人麻呂がよく聞いてやるので、それまでは寂しかった人麻呂の館へ、土産の野菜や魚貝をたずさえて、ぼつぼつと人々が集まるようにもなった。仕事や人々との交わりを通じて、この鄙の国の実情を知り、人々の生活にかかわることは楽しくさえあった。黒人は暗示した。民の実情を見よと。

もともと人麻呂は、ふつうの人々の生き死にを凝視してきた詩人だった。というより、人麻呂自身が大和の田舎でふつうの人々に囲まれながら育ったので、彼の心には民衆的なものが深く息づいていた。歌でも、彼は素朴な民の歌を愛し、集め、自身の歌作の豊かな支えにした。宮廷に召されてからも、彼は天皇讃歌ばかり歌ってきたのではない。壮麗な藤原の宮、そのすぐ東方を占める神聖な天の香具山、しかしそのほとりに行き倒れた旅人の屍を、彼は歌った。

草枕 旅の宿りに 誰が夫か 国忘れたる 家待たまくに

草を枕に故郷の国を忘れて行き倒れているあなたは、いったい誰なのか。家ではあなたの妻が、今か今かと帰りを待っているだろうのに。あるいは讃岐に出張した時も、狭岑島の海岸に流れ寄った水死体を見、悲しんで長歌、反歌を詠んだ。

沖つ波 来寄る荒磯を 敷妙の 枕と巻きて 寝せる君かも

それらは都の宮人たちには必ずしも評判がよくなかったけれども、人麻呂にすれば不幸にして客死したふつうの人々やその家族への憐れみと鎮魂の思いでやむにやまれず発した言葉だった。

乙女のもとに通うことが、乙女の視線から人々の暮しを眺めることにもなった。乙女の親族や近隣の人々とも少しずつ交わりができた。すると、郡司層はまだしも、大多数の人々が生き続けるのがやっとの貧しい暮しを強いられていることがよくわかった。税や強制労働の負担は決して軽くはなく、彼らを支配する役人もいたわりに欠けていた。今までもそうだったように、日照りや大風やイナゴの害やの天災が少しでも見舞えば、多くが飢えるのは目に見えていた。彼らの側に立つことは無理でも、人麻呂はせめて彼らの生活や心情を理解しようと努めた。

闇が濃くなり、人麻呂は馬を速めた。それでも角の里に着いたころにはすっかり暮れ、満月に近い月が東の山の上に明るんでいた。

人麻呂を迎えた乙女は、常のようにかいがいしく夕餉のしたくに気を配った。土間の囲炉裏に掛けた鍋が煮立ち、板間に膳が用意された。近隣の茅屋からも、夕餉の囲炉裏を囲んでいるのだろう、物音に混じってさまざまな声が聞こえてきた。笑い声、

子供の叫び、親の叱る声、赤子の泣き声。そうした家族のまどいを、人麻呂はなつかしいもののように聞いた。かつて大和で、自分も妻や小さな子供たちと睦みあつた時期がある。その妻は若くして死に、子供は夭折した者もあれば成人した者もある。死者る者たちは黄泉の国でどうしているか、生者たちはこの世でつつがないか。

夕餉を終えると灯火を消し、夜具に伏して乙女を抱き寄せた。ともに春夏を過ごし、ひとときの狂熱はおさまったものの、おだやかなうちに乙女との交わりは確実に深まっていくようだった。夜床で乙女は波に揺れる海底の玉藻うみせきのように靡き起き、靡き伏す。乙女の身体はよほどやわらぎ、男の身体に馴染むようになった。というばかりか、包み込み、密着し、あるいは拒否して、男の身体を支配しようとした。逢うごとに深まってゆく女の性に、乙女自身がとまどうようだった。そのために枕辺で身を悶え、よくすすり泣いた。

そしてまだ収まらない息の下から、今夜も乙女は嘆くのだ。あなたは私が好きか、どれほど好きか。ああ、言葉では何とでもいえても、ほんとうはあなたは私を深く思っていない。私など、草深い田舎女にすぎないんだもの。都のきれいな女たちに比べればもの数ではないでしょう？ ああ、ああ、あなたになど逢わなければよかった。そうしたら私はもっと気楽に暮せたのに。毎日あなたを待っているのはとても辛い。宵ばかりでなく、昼間もあなたのおもかげに苦しめられる。夜の夢の中でも夢の中でお逢いするのは、私、いやです。さめた後が辛いから。朝のお別れはもつと辛い。ああ、ああ、私をこんなにして、どうしてくれるのですか、あなた……。

人麻呂は抱き寄せ、なだめにかかる。恋の重さには自分も苦しんでいるのだとささやく。乙女の気持ちが変わりすぎるので、涙が流れた。やがて乙女の小さな惑乱はおさまっていった。

板戸を少し開くと、中天に上った月が白々と光をそそいでいた。あたりも寝静まつたらしい。秋たけて草地の虫の音も弱々しくなった。

冴えかえる月を望みながら、人麻呂は大和の三輪山にかかる月や、香具山や二上山に降りそそぐ月光を想った。夜の中に白く浮かび上がっているだろ藤原の都を想い、ゆかりの人々をなつかしんだ。もう長の月日、大和には帰っていない。ただ、そうして家郷をなつかしみこそすれ、こうしていぶかしいほど満ち足りた気持ちで鄙の月を眺めている自分だった。宮廷の殿舎の窓から月を見た我と、こうして茅屋のかげから鄙の月を眺めている我と、いずれがほんとうの我であるか、いずれの我がよく生きている我であるか。

乙女も人麻呂に寄り添い、ほうけたように月夜を眺めていた。風が冷たくなりまきり、露も降りてきそうだった。

その夜、乙女は身ごもつたらしいことを人麻呂に告げた。

晩秋、国庁は忙しかった。

この時期国司は、年間の人事に関する行政報告を書き連ねる帳簿の作成に追われる。国郡司の役人一人一人の政務ぶりを記した朝集帳にもろもろの公文が加わる。十月にはそれらを携えた朝集使を都に送らなければならない。朝集使はそれらを、新令によって名の改まった式部省や兵部省に提出するのだが、その中央の役人たちの検閲や下問は手厳しい。それに報告の内容はたちまち自分たちの考課にはね返ってくるので、常はのんびり構えて田舎勤めをかこっている国の守以下の役人たちも躍起になった。国役人に混じって国内五郡から呼びつけられた郡役人たちも、そう広くもない国庁の建物の中を木簡の束を抱えたりしながらせわしく行き来していた。使に選ばれた者たちは勇んでいた。久しぶりに帰京し、親族や知己に会うことができる、あるいは都の空気を吸うことができる。中には人麻呂の推薦をありがたがって札を述べに来る若い下僚もいた。

都の太政官から特に人麻呂に宛てて急使が到着したのは、そうした騒ぎのさなかだった。使者の携えてきた文書は、人麻呂の上京を命じていた。十二月に御大葬を行う、ついでに歌を献るべし、まずは朝集使として上京のこと、と。

人麻呂は唸った。去年の暮れ以来上皇の殯宮が長々と続いていることは、特に高市黒人から聞いて知っていた。そして都のいくたりかの歌人が挽歌の制作を命ぜられるだろうことも予測できた。しかしその中に自分が入ることは想像の外だった。

また、人麻呂は恐れた。黒人は話していた、挽歌の献呈を機に自分を都に呼び戻すこともありうる。あの時は一笑に付したのだったが、今となってはそのことをあながち打ち消すことはできない。それにしても、仮に俺を呼び戻したとして、いったいこの俺に今さらどんな歌の場を用意するというのか、何事も移り行くこの時代に、どんな歌を歌えと強いるのか。今度の御大葬にだって、うまく作り上げる自信はない。歌の言葉だけなら、それはいかようにもつづれよう。だが、そこには決してかつてのように言霊は宿るまい。そんな魂の抜けた歌がいったい何になるというのだ。もはやそんなふうには歌いたくないのだ、この人麻呂は。乙女とならいくらでも歌える。だが都では、もう歌えぬ。

国の守や下僚は人麻呂の上京を祝福し、また羨んだ。けれども人麻呂自身は、浮かぬ顔でいるしかなかった。

乙女にはある夕方、角の浜に連れ出して告げた。聞くと乙女は顔をこわばらせてその場に坐りこみ、しばらくは泣くことも忘れていたのだった。

海上の雲はまだ余映を残して朱に染まっていたが、東の山の上はすでに藍が深まり、寒気もまさってきた。白い空の高みを雁の群れが鳴き渡ってゆく。海は静かに色を殺していった。

「いつ、お帰りになりますか？」

か細い声で乙女が聞いた。

「わからぬ。だが俺は、必ず帰ってくる」

「信じられませぬ。天子様がお帰しになられますまい」

「いや、何としても帰ってくる。いつかもいったはずだ、致仕を願い出ても帰ってくる」と

「そんなことおできになるわけがない。天子様がお許しになるはずがない」

「仮にそうだとしたら、おまえを都に呼び寄せよう。どうだ、都に来てくれぬか？」

「老いた母を一人残して行けませぬ。幼い者たちの世話を誰がするのですか。それに……私はこの石見の地が好きです」

「そうか……。俺はもう、おまえと離れて生きるつもりはない。天子様がお許しにならないなら、逃亡の罪を犯しても俺は帰ってくる。追っ手に追われても、命は惜しまぬ。夜も昼も歩き通して、かならずここにたどり着こう。よし身体は滅びようとも、魂だけでもたどり着けぬことはなからう。だから待っていてくれ」

「今はあなた、そうおっしゃっていても、都の暮しに戻るときつと都がよくありませんわ。あなたは都の方ですもの。都の彩りはすぐこの石見や私をかすませますわ。ごらんなさいあなた。この石見には何も無いわ。……もう、いいのです。私はあなたをお待ちしますまい。つらいもの。どうぞ、もうここには帰らぬとおっしゃって。その方が私は気楽です。いえ、心配しないで。私、死んだりはしませんから。自殺は醜いもの。生きながらえますわ。やがてこの子も生まれてくるんだもの」

ふだんのとおり冷静で賢明なもの言いのようだが、別れの事実の重さが、若い乙女をやはりどこか狂わせていた。

その後乙女は食を細らせ、見るからにやつれていった。人麻呂にはしかし、もう慰めの言葉もなく、旅立ちの日まで足しげく乙女のもとに通うのがせいぜいだった。

西に傾いた日ざしが色づいた山々の陰影を深くしている。松林の向こうの海の色が冴えかえっている。

一行の前に石見一の大河の河口が広がり、川は秋水を集めて滔々と流れ、海に躍り入っていた。その渡し場のほとりで神祭りを済ませると、人々はあらためて互いに別れを惜しんだ。朝早く見送りの人々とともに国府を出立してきたが、見送りもここままで、人麻呂以下三名の使人と仕丁数名は、かねて用意の船に乗りこんだ。川岸に残された人々はさかんに袖を振り、別れの言葉を叫んでいる。「つつがなく！」「幸ゆきくあれ！」「早帰れ！」などの声が、しだいに笛の音のようなたよりなさになって風にまぎれていく。

人々の中に依羅乙女の姿もあった。悄然と立ち、それでも習わしに従って懸命に袖を振ろうとしていた。乙女よ、袖を強く振れ、もっと激しく振れ、と人麻呂は願った。その着物の袖から乙女の魂が漂い出て我が身を守るだろうことを人麻呂は信じた。

な思ひと 君はいへども 逢はむ時 いつと知りてか 吾が恋ひざらむ

前夜、最後の抱擁の後で乙女が口ずさんだ別れの歌を、人麻呂はくり返し口にしてみた。心配するなどあなたはおっしゃるけれど、いつまた無事でお逢いできるかわからない、それがつらくてつらくてしかたないので……。しだいに小さくなってゆく乙女を見つめながら、人麻呂は上着の上から腰のあたりを押さえてみた。下衣には乙女が手づから縫い付けてくれた紐が結んである。そこにも乙女のいとおいしい魂が宿っている。

対岸に上陸すると、馬を連れた駄丁が数人待っていて、人麻呂はその一頭に帳簿の包みをしっかりと結わえ付け、再び馬上の人となった。振り返ると、まだ対岸にたらずんでいるひとかたまりの姿はもう松の木立にまぎれてしまいそうで、乙女の姿も見分けられなかった。

道が川べりを離れて渡りの山にかかると、人々はここでも行路の無事を祈って塞の神に幣をささげた。山はもう激しい紅葉の落下で、人々の上にも色づき乾いた葉がはらはらと降りかかってくる。時おり海からの冷たい風が吹き抜けると、それは身をおうほどに舞い散り、振り返ってもまた落葉が視界をさえぎるほどだった。

秋山に 落つる紅葉葉 もみちば しましくは な散りまがひそ 妹 いも があたり見む

また一面に笹の群生する斜面のそばを行くときは、笹原は風のかたちを見せて騒いだ。

小竹 ささ の葉は み山 みやま もさやに さやげども 我 われ は妹思 いも ふ 別 わか れ来 こ んぬれば

馬上に揺られながら、人麻呂は重く悲しいわが心を見つめた。わが心は今、わずかなあの一人の乙女にばかりとらわれていると悟った。そしてそこから歌があふれ出てくる不思議を思った。これほど重く悲しい心で自分はいるのに、ほとぼり出ようとする歌とはいったい何か。いや、そうではないのだ。重く悲しいからこそ、心は歌わないではいられぬ。そう、歌でこそ存分に泣き叫ぶことができるのだ。人麻呂は打ちひしがれながら、同時に自分に陶醉していた。

乙女とともに眺めた辛 から の崎 さき の海景が浮かんで来た。その暗礁に生えるきれいな藻、青い深みにただよう海松 み、それらのように夜床で靡き伏した乙女……。歌句が口をついた。

つのははふ 石見の海の

言さへく 辛の崎なる

海石 いくり にぞ 深海松 ふかみ 生ふる

荒磯ありそにぞ 玉藻は生ふる
玉藻なす 靡き寝し子を
深海松の 深めて思へど

人麻呂はそこまでを何度かくり返してみた。思えば春に乙女とめぐり逢い、夏秋と過ごしただけで、這う鶯の先が分かれていくようにもう別れてゆかねばならない。

さ寝し夜は いくだもあらず
這ふ鶯の 別れし来れば

肝に向き合っている心の臓、その心はこれほど痛く、かの姿ようか見えよと念じて振り返り振り返りせずにはおられない。

肝向かふ 心を痛み
念ひつつ 顧みすれど

けれども、どうであるか。大船おおぶねで渡る、その「渡り」という名をもつこの山は、今しも寒風にさらされてさかんに紅葉が散っている。それが乙女の袖振る姿を隠してしまふ。

大船の 渡りの山の
紅葉もみぢばの 散りのまがひに
妹が袖 さやにも見えず

またかなたは妻のこもる屋というゆかしい名をもつ屋上やかみの山、その雲間から昇った月が惜しくも姿を隠していくように、乙女の姿はもう隠れてしまった。

妻つまこもる 屋上の山の
雲間より 渡らふ月の
惜しけども 隠らひ来れば

折しも天あめを伝って西の水平線に沈もうとしている日輪が最後の光芒を放ち、この世ならぬもののように紅葉を染め上げてゆく。

天伝あまつたふふ 入り日さしぬれ

一瞬あたりが明るくはなやぐと、しかし心の暗さ、寂しさはかえってきわだつのだ。乙女の姿は、もうどこにもない。この悲しみは死に似ている。別れは心が死ぬのだ。我こそは心猛きますら男であると思つてはみても、涙がはらはらとこぼれて衣の袖を濡らす。

ますらを
しきたえ
大夫と 思へるわれも
敷妙の 衣の袖は 通りて濡れぬ

親しい者たちとすつかり別れて、また前途の旅の労苦がにわかに胸に迫ってきて、一行は人気ない寂しい山道を言葉もなくくれくれと進んでいった。行く手は果てしもないような山陰道が、出雲路から向こうへと続いている。

一行の通つた後にも、紅葉葉は宴のようにさかんに舞い落ちた。

(その後のことは題から遠ざかるので、ここまでとしよう。ただ、筆者として、少し周辺のことを補っておきたい。

いわゆる「石見相聞歌」というのは、柿本人麻呂が石見の国の妻と別れて上京する時に作った一連の歌をさし、『万葉集』に載っている。長歌と反歌のセットで三群九首もが、古撰部である巻二の「相聞」の部の終りに堂々とくり展げられている。同じテーマで複数あること、また歌詞を推敲した跡もあちこちに残っているのは、これが人麻呂の渾身の力作であつたこと、および当時の人々に広く受け入れられたことを示している。

『万葉集』巻二の後半は「挽歌」の部で、一面人麻呂挽歌集のおもむきをもつほど人麻呂の歌が卓越しているが、その終りの方にも人麻呂と依羅乙女に関する歌がある。三首あつて、その一つ目は「柿本人麻呂が石見の国にいて死に臨んだ時に自ら悲しんで作った歌」と題し、

鴨山の 磐根し巻ける われをかも 知らにと妹が 待ちつつあるらむ

とある。人麻呂辞世の歌で、鴨山で岩を枕にして自分は死んでゆく、それも知らないでわがいとしい妻は私を待ち続けているだろう、という。「石見相聞歌」の方は長い。長いが状況はわかりやすい。対してこの題と挽歌の方は短い。短いが後世の読者をいきなりミステリーの渦の中に投げ込んでしまう。人麻呂という大歌人の山中での死という異常さ、しかもそれを自ら歌つたというふしぎ、いきなり出てくる「鴨山」とはどこのどういう山なのか……。鴨山の所在は、斎藤茂吉の論などあるものの、今もわからない。その人麻呂の死がいつのことだったのかも不明だ。

そしてこの歌の次には、そうして人麻呂が死んだ時、妻の依羅の乙女が作ったとい

う歌二首が配されている。これらの歌も謎めている。

今日今日と 吾が待つ君は 石川の 貝に（別の伝えでは、谷に）交りて

ありと言はずやも

直の逢ただひは 逢ひかつましじ 石川に 雲立ち渡れ 見つつ偲はむ

今日か今日かと私がお帰りを待ちわびているあなたは、なんとまあ、石川の貝に交って亡くなっているというではありませんか。だとしたらもう直接にはお目にかかれないでしょう、せめてその石川の上に、夫の魂よ、雲となって立ち渡ってください、それを見て私は偲びましょう、という歌だ。人麻呂が「貝に交って」横たわっているとは、なんとという表現だろう。

三首を統一的に解釈するなら、ある時人麻呂は旅（石見国内の？）をして妻、依羅乙女のもとへ帰ろうとしていたが、どのような事情があつてか、不幸にも石見の国の鴨山の石川で死んでしまった、それを耳にして乙女が悲嘆し、鎮魂した、そのようになろう。でも、そのような死の事実、また歌作の事実がほんとうにあったのだろうか？

現代の学者たちがいうように、これらは事実というよりも、著名歌人人麻呂の死後まもなく、おのずと人々の間にどこから誰からともなく起こった、人麻呂をめぐる語り伝えの一つなのかもしれない。そうだとすると、これら三首については人麻呂や乙女の実作かどうか疑われる。

でも、だからこれらの歌には意味がない、というのではない。

『万葉集』巻二は相聞と挽歌の双方で、石見という当時の野性的な土地を舞台として、柿本人麻呂と依羅乙女との熱烈な恋とその結末を伝えている）